

大阪大学本部棟の設計について

川崎 清*

大阪大学の本部棟が昨年の三月に完成し、中之島にあった事務局は逐次移転を開始し、夏休み明けには本部の諸活動は完全に吹田地区へ移った。この吹田地区には第一と第二の二つのキャンパスがあり、第一の方は犬飼池周辺など一部を残してほぼ完成しているが、第二キャンパスの方は薬学部、人間科学部など一部の移転学部があるにもかかわらずキャンパス整備は遅々として進んでいない。もともとは大阪万博の駐車場跡地であり、当時のアスファルト舗装の大部分が残されたままで、まことに荒涼たる雰囲気である。本部棟はこれらの二つ、キャンパスの接するところに建てられた。

大学の本部棟は大学全体の重要なシンボルとなる施設の一つである。そこで将来の歯学部、医学部など、吹田地区への移転整備が完成する時点では吹田地区のシンボル、或は阪大全体のシンボルの一つとなるだろう。第二キャンパスではこれから移転する施設の細部は未だ決っていないが、全体の敷地のあり方の計画の考え方はほぼまとまっている。それによれば、この本部棟の建つ周辺は、本部地区として講堂などの中枢施設が建てられる方針となっている。

従来大学のシンボルとは何かという議論は、過去大学の長期計画委員会などで時々話題になったことはあるが、特にどうしなければならぬという結論はでていない。内外の大学の諸実例を調べて見るとこれは色々である。我が国では東大の安田講堂、京大の時計台、早稲田の大隈講堂など、時計を持った塔状の建物が代表例のように考えられているが、しかしよく調べて見ると必ずしもそればかりではなく、本部ビル、講堂、音楽堂、礼拝堂、図書館、資料館、学生会館など色々であり、また広場、並木

池、河川、や丘陵などがシンボルとなっているものもある。これは海外の場合も同じである。しかしいずれにしても共通していることは、たとえ建物がシンボルとなっている場合でも、その配置やひろばや、それを取り囲む建物群などの周辺環境において、シンボルをシンボルたらしめるための演出がなされて、環境全体がシンボル性を高める構成となっていることである。

新しい大学のシンボルとしては、時計台や塔の如く際だった権威を示すような形にすることが必要なのか、学園生活に快よい印象を残す、親しみ易い空間が必要なのかは意見の分かれるところであろう。長期計画委員会の下で本部地区小委員会が設けられ、本部地区のあり方について検討されたが、塔型よりはひろ場型の構成が推奨された。そのような希望を受けて、緑豊かなひろ場、並木、森などをつくり、快よいキャンパスとなることを仮想しながら、その中心に据えるにふさわしい建物をイメージした。そして将来はひろ場を囲んで講堂、集会場、休憩施設などを連帯させ、シンボルゾーンを形成することになろう。かくて、建物は塔状に高くするよりは水平に長く、両側にある二つの丘をつなぐようにして環境になじみやすい形をつかった。この本部棟より少し前に出来た、東大の新しい本部ビルが垂直にそそり立っていることに多少の抵抗を感じたことも加わって、対称的な構成となった。建物の色も大地から這い上るように土っぽくし、緑の斜面が建物につながるように建物のバルコニーなどにもふんだんに緑を植える考えであった。タイルの色は何んべんも見本張りを見て決めたのであるが、張りあがって見ると思ったより少し赤味が勝った感じで仕上がった。それはそれでけっこういい色が出たと思っているが問題は緑の方である。予算の問題もあるが、いささか貧弱で画龍点睛を欠く感

*川崎 清 (Kiyoshi KAWASAKI), 大阪大学, 工学部環境工学科, 教授, 工博

じであり、将来何らかの手を打って貰いたいものである。

さて、ここで若干建物の概要に触れて見たい。構造は鉄筋コンクリート5階建てで、総面積は7532m²（車庫共）であるが、段差のある敷地なので2階に正面玄関があり、4階建てのように見える。東側の丘には高圧送電線があり、西側には吹田市の貯水タンクがあるのでいささか風景を損ねている。貯水タンクの方はいずれ講堂でも建つようになれば隠れるが、送電線の方は関西電力の方で何とか考えて貰うしかないが、そう簡単に応じてくれる訳がないから気長に待つしかない。学生部は南側ひろ場に面した快適な場所で、北側からも南側からもアプローチし易い位置であり、トップライトなども入れて明るい空間とし、従来の暗いイメージを払拭したいものと考えた。2階の玄関ホールも南北両面から車で進入できるように、2階吹き抜けのピロテールをつくり、ガラス張りの見晴らしのよいロビーを入れた。南面に植樹をしたテラス

を入れたが、植栽については先に述べたように将来に問題を残している。玄関ロビー正面の壁面には京都の芸大の教授であり、工学部建築科で彫塑の講師をお願いしている野崎一良氏のレリーフが飾られている。抽象的な形でいささかとまどう向もあるが、「拓」と題している。芸術に理屈をつけるのはどうかとお叱りをうけるかもしれないが、学術研究の先進的な開拓を希ったものであろうか。本部事務関係の部局は概ねフロア毎にまとまっていて、2階が玄関と厚生関係、3階が経理、4階が庶務と総長室などの首脳部、4階が施設部と工事事務所関係が主な配置である。4階5階には共通の会議室関係諸屋がまとまっている。他にピロテールをはさんで東側に機械室、計算機室、休憩室などがある。

さて本部棟を機能一辺倒にしないために、先のレリーフの他に大会議室と特別会議室の正面には陶板の壁画を飾って潤いを与えている。大学の建物としては少しぜいたくではないかなど

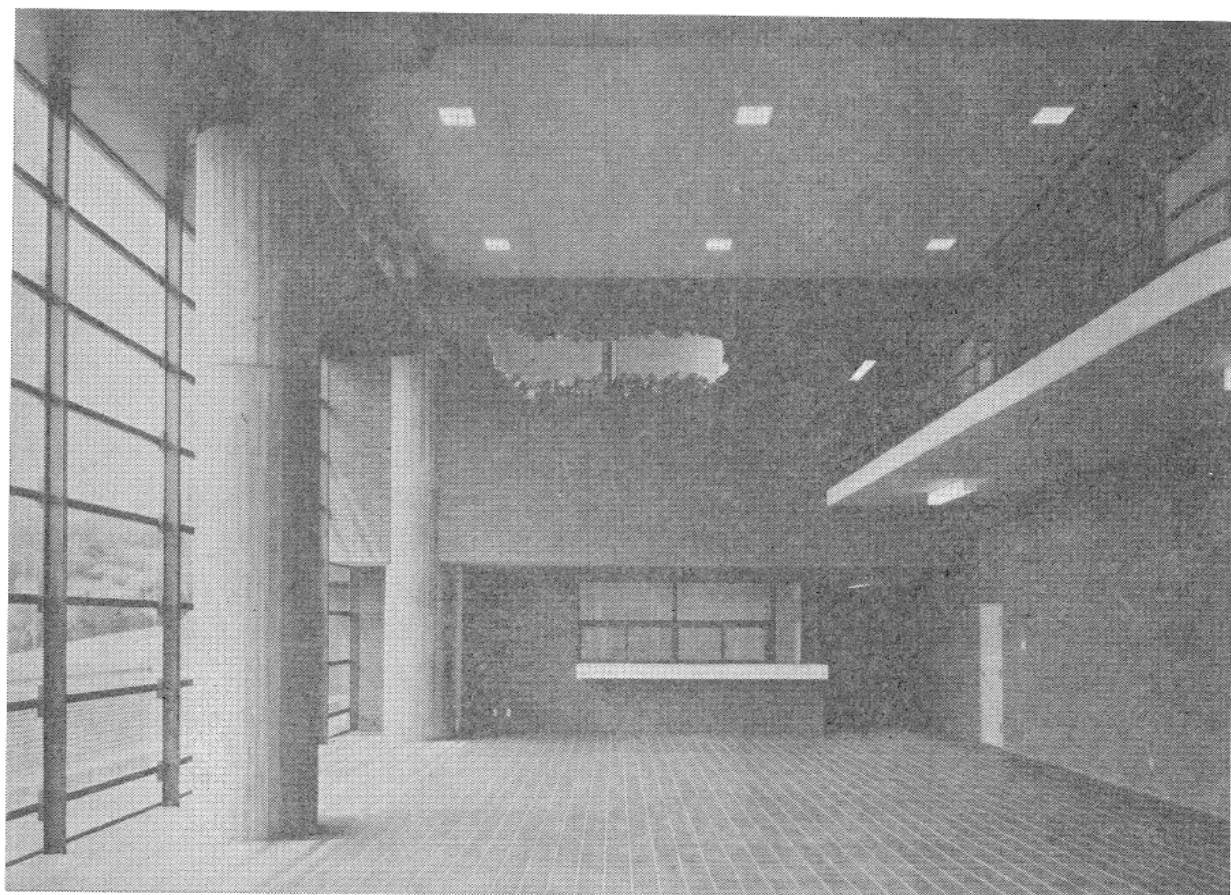


写真1 玄関ロビー正面野崎一良氏レリーフ「拓」

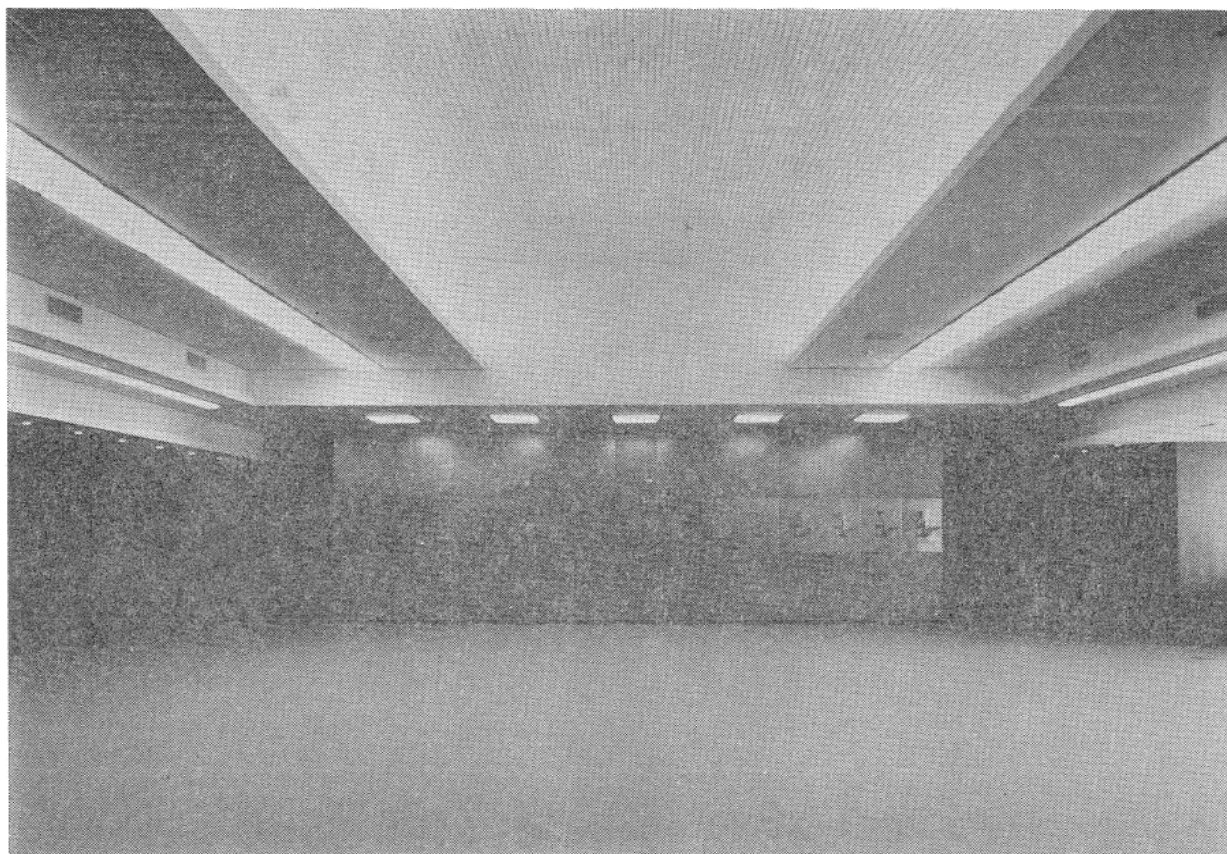


写真2 大会議室正面陶壁画木村光佐「孤独の影」

考えられる向もあるが、規定の文部省予算をやりくりしての話で、特別の予算をつけ足したとか寄贈を仰いでのものではない。施設部、建設関係者などが本部ビルを良くしたいという熱意に溢れて努力した結果である。特に工事を請負った大林組を始めとする工事関係者は、無駄な経費を極力切り詰め、後に残るものに工事費を廻すやりくりをやったことに負っている。

大会議室の壁画の制作に当っては、文学部の木村教授の推薦で、版画家として活躍している木村光祐氏を起用した。当初、彼の代表作の一つである能面の版画をもとにデザインをすすめていたが、一日木村教授のお宅で光祐氏と三人で、雑談しているうちに、予備候補の椅子のモチーフの方と入れ替ってしまった。会議室なので椅子のデザインの方が適うとか適わないとかの議論の果てではない。またこのモチーフを「孤独の影」と題しているが、彼の最近の作品のシリーズの一つである。題名の真意についても問うてはいない。何となく良さそうだということで落ちついた。

特別会議室の方は何か大阪にちなんだ素材がないものかということで、色々資料を当っているうちに見つけたのが、大阪市街図屏風である。京都の中京に住む林卓さんの所蔵になるものであり、作者は不詳であるが、江戸時代初期の大阪の様子を画いたものとしては出色の名品である。ここに用いたのは六曲半双の一部であるが、一曲は後補の部分であったり、大阪城天守閣の表現が史実と違っているのではないかななどの説があったりしたので、曖昧な部分を除いて、天満橋附近の確かな部分をコピーすることにした。現物の屏風はたまたま屏風絵展出品のために大阪城天守閣に置かれていたので林さんの諒解を得て撮影に入った。この壁画は、カラー写真を拡大してシルクスクリーンで陶板の上に複写し、それに釉薬をかけて焼きあげるといふ特殊な技術によって焼かれた。何十色という釉薬を色見本をもとにして色合わせをしながら何人もの職人が手描きでかきこむという大変手間のかかったものである。焼きつけ前の釉薬で画くのだから色合わせは大変である。しかも大



写真3 特別会議室 正面陶壁画 大阪市街図屏風（林卓氏蔵）

型陶板なので、焼く時にひずみが出来たり、割れが生じたりすると、苦心の制作も水の泡になるので、制作は入念な技術をもとにして行われた。先の木村光祐氏の壁画も同じ手法で、共に信楽（しがらき）で焼いたものである。これらの壁画の採用については本部地区委員会の中でも歓迎された。大学では当時適塾の修復に関心が集っていた頃であり、市街図屏風については、大阪の歴史的な生活や文化に対する大学の関心を示すものとして大方の賛成が得られた。

建築をつくる過程は、工業製品のように無機

的な乾いたプロセスで出来上がるものではない。大きな機械力を用いるが、極めて人間的なやりとりのうちに進められる。それは案を検討する段階もそうであるし、建設に入ってからでもそうである。従って空間や建物の部分の一つ一つに人間的な意味や願いがこめられているし、手づくりした工人達の汗が結晶している。建物が人を拘束しすぎてはよくないが、用いる人は建物に対する多少の思い入れをして欲しいものだと思っている。これは建設に関係した人々の共通した気持であると思う。